

異言語は、ある意味に於て、社会の運動の性質を示すものであり、それに着目することは全く今日必要ではあるが、そのととのために

異言語を支えている正常類の統論を発達してはならないと思ふ。例えば、漁村に於ても、社会・経済的諸条件の変化に随じ、漁港開拓の傾向が進行すれば、漁次、漁村的或は漁港的要素を強めてくるが、しかも漁港然として、漁村としての基本的機能を強く残していく。

いわゆる「漁村としての基本的性質」とは何であるか、「漁村をして漁村ならしめるもの」は何であるか。そのような「漁村の常識における本義」といったものが、漁村經濟的研究からいわれてゐるところはない。先づいよろしくお読みらう。

基本概念の検討

(島根) 山 間 栄 市

待望久しかつた鈴木栄太郎氏の「都市社会學原理」が公刊されたので、さつと目を通させて頂いた。いろいろと示唆を受けるところがあつたが、「都市に関する病態や政策や埋根に触れるのは、社会学の本来的な研究ではない」とし、社会学はその常識の研究即ち氏のいわゆる「都市の正常人口の正常生活」の研究であるべきこと、及び「都市をして都市たらしむるものは、社会的交流の結節的機關がそこに所在している点にある」とされる二点に、私自身は最大の御教示を受けた。長きにわたる実証的研究と理論的精緻を経て、こゝに到達された先學の學問的情熱に対し、まことに心打たれるものがあった。

さて、われわれは農村や漁村の調査を行つて居り、その病態や異常様に陥穽され、その常識の光明を絶するしかつたであるうか。

「漁業を中心とする漁村」などといつてみても課題は少しも解決されないのである。漁村についても同じことながら見るのではあるまい。村研は、このような基本的な概念について、しかも実証的研究に依頼しちまつて、必ず論究してゆく場でなければならないと思われる。私は、いろいろな感情のため、今まで一瞬しか参加していないので、さしつけ資格を持たないのであるが、これらの点について先學諸賢の御教示を得たいと思う。昨年度は「村越共同体」のテーマが掲げられて、始め經濟史学や歴史学におけるそれとの比較検討に於て、社会学内外共同体理論が正確にされることを期待したいと思う。鈴木氏の大著にふれて示唆を受けた現在の感想の一端を述べて、編集者への貢献がせて頂いた次第である。(一九五八・一・三一)